

初期仏典における布施の拒否に関する一考察

千葉公慈*

Studying the Rejection of Fuse (dana) in Early Buddhist Scriptures

Koji CHIBA*

Abstract

With respect to religion, ideas on universal salvation based on philanthropism as a prerequisite for the person who seeks religious teachings have often been reported. However, to what extent can these assumptions hold true? In fact, the problem of philanthropism in religion is a deeply rooted theme that has been extensively discussed as is observed through various texts since ancient times. In other words, it is a problem of religious exclusiveness and tolerance. Buddhism is certainly no exception. Since early Buddhist scriptures, this problem or religious taboo has been included in several precepts; furthermore, rejection or exclusiveness of Buddhism has also been frequently observed. Accordingly, there are, in fact, many instances when Buddha, who should have been the savior, rejected those who sought salvation.

This essay focuses on the offerings made toward the Buddhist saints, particularly in the Butsuden or the biographies of Buddha (records of the life of Buddha) . Thus, it focuses on examining the distinctive features of the act of rejection with regard to the act of Fuse (dana) toward Buddha and identifying if it has any significance. Thus, by examining this exclusive aspect of Buddha, this paper attempts to identify what Buddhism seeks from the world and tries to discover the mission's direction for the masses when the Buddhist religious establishments were founded.

【1】問題の所在

宗教である限り、その教えを求める者に対しては、いわゆる博愛主義に基づく万人救済の思想が前提となるという類いの指摘は多く報告されている¹。また仏典における同趣旨の説示も極めて多い²。しかしながら、果たしてこれらの前提は、どこまで成立し得るのであろうか。実はこの宗教における博愛主義の問題は、古来

多くの典籍から知られるように、大いに議論されてきた根の深いテーマでもある。すなわち宗教における排他性と寛容性の問題であるが、もちろん仏教においては例外なく扱われてきた。その問題は初期仏典以来、特に多くの戒律がその宗教的タブーを含む範疇でもあり、それゆえに仏教の拒絶ないしは排他性の一面は、我々の頻繁に目にするところでもあった。したがって

*人文学部 日本文化学科

救済者であるべきブツダが、意外にも救済を求める者たちを拒絶する場面が少なくないという事実は、我々にとって仏教思想の本質に関わる看過できない論点と認められる。

小論では、特に仏伝における聖者への献供、とりわけブツダへの布施 (dāna) の営為における拒否の場面について注目し、そこにいかなる意味が見られるのかを考察する。すなわちブツダの排他的な一面を検討することによって、その反面にある仏教側が世間に強く求めていたものを明らかにし、さらに仏教教団成立時の大衆へ向けた伝道に関する新たな方向性を見出そうと試みるものである。

【2】バラモンに対する報酬の意義

端的にいえば、仏教成立当時のバラモン教は「祭祀 (jajña)」を行うことを主な目的とする宗教であった³。すなわち祭祀におけるさまざまな行為に対してバラモンたちは布施を得ていたわけであるが、その祭祀の中には聖典の言葉を唱える行為自体によって、その対価として布施の供養を得ていたことがわかっている。すなわちそこではヴェーダの呪句が詠唱され、その見返りとしての種々の物品が生活の収入源となっていたことになる。したがって仏教成立前夜の当時は、農耕をはじめとする種々の労働に就きながら宗教儀式的祭祀を行うバラモンたちがしばしば出現するほどであったため、当然のことながらごく自然に聖典の呪句を唱えること自体、その行為に基づく報酬によって生活を維持しようとするバラモンが多く存在したのである。

こうした行為は、一見現代の仏教僧にとって不自然ではないことと受けとめられるであろう。要するに読経の対価としてお布施を受けるという形態であるが、少なくともブツダは仏教教団の成立に臨み、そのような手法による布施行為

は断じて受け入れられないことを宣言していた点は看過できない意味をもっている。すなわち供養をうけるべき布施の対象は、決して如何なる形であっても労働行為であってはならないとする揺るぎない一線を他宗教との間に引いていたことになる。おそらく読経や説法が労働行為の範疇になることを極力嫌った結果ともいえるであろうが、あくまでも禁じられるべき労働行為としての位置づけという意味に止まらず、布施の対象を修行者そのものの人格に据えることが目的であったのではないかと推測する。

ちなみに布施の対象が行為であるべきか、人格であるべきかの問題の検討には極めて慎重な注意を払う必要がある。すなわちその境界線こそが仏教とそれ以前のバラモン教の特色を分けられていると考えられ、かつまた最初期の仏教においては、その境界線に明確ではない部分も残る⁴からである。しかしながら、概してバラモン教では神々への供物 (huta) が重んじられた⁵のに対して、最初期の仏教ではブツダの如き道の完成者自身へ向けて供物を捧げることが求められている⁶ことが確認できるならば、布施の捧げられるべき対象の存在意義を知ること可能となるだろう。

それでは上記の仮説を検証するために、以下に『相應部 (サンユッタ・ニカーヤ: Samyutta-nikāya: 以下 SN)』等に記載されている布施の拒否を端的に説示している各節について、その2カ所を試訳し、今後の詳細なる検討の根拠として提示する。

【3】布施を拒否するブツダー火を捧むスンダリカ・バラモンの場合

- 1) 文中の番号は、SNにおける各文節の通し番号に対応している。
- 2) 固有名詞ならびに通常音写語として用いられる術語は、カタカナ表記とする。

3) 原文にはないが、補った方が理解に便と判断される言葉や、基本情報として必要なコメントは、[] によって示した。

4) 重要な術語は、() によって対応するサンスクリット語および適語を示した。

5) 典籍一般は、『 』によって示した。

9. Sundarika⁷

1. Ekaṃ samayaṃ Bhagavā Kosalesu

viharati Sundarikāya nadiyā tīre // //

[次のように私は聞いている。すなわち] あるとき尊師（ゴータマ・ブツダ）は、コーサラ国のスンドリカー河の岸に滞在されていた。

2. Tena kho pana samayena sundarika-

bhāradvājo brāh-maṇo Sundarikāya nadiyā tīre aggim̐ juhati aggihuttaṃ paricarati// //

ちょうどその時に、バラモンであるスンドリカ・バーラドヴァージャは、スンドリカー河の岸辺で供養燈火を行い、拜火の供養を行っていた。

3. Atha kho sundarika-bhāradvājo brāhmaṇo

aggim̐ juhivā aggihuttaṃ paricaritvā utthāyāsanā samantā catuddisā anuvislokesi// // Ko nu kho imaṃ havyasesam bhuñjeyyāsi⁸ // //

さてバラモンであるスンドリカ・バーラドヴァージャは、供養燈火を行い、拜火の供養を行ない終えた後に、座席から立ち上がり、四方の周囲を見渡して述べた。

「誰がこの [供養を終えた功德ある] お供物のおさがりを受けて食べるのに相応

しいだろうか？」

4. Addasā Kho sundarika-bhāradvājo

brāhmano Bhaga-vantaṃ aññatarasmim̐ rukkhamūle sīsam⁹ pārutaṃ¹⁰ nisinnaṃ// disvāna vāmena hatthena havyasesaṃ gahetvā dakkhi-ṇahatthena kamaṇḍalaṃ gahetvā¹¹ yena Bhagavā tenupa-saṅkami// //

その時に、バラモンであるスンドリカ・バーラドヴァージャは、尊師（ブツダ）がある樹木の根もとで頭を衣で包んで坐っていっしやるのを見つけた。[よく確認して] 見終えると、左手にお供物のおさがりを持ち、右手に水瓶を持って、世尊[のおられるところ]に近づいて行った。

5. Atha kho Bhagavā sundarika-

bhāradvājassa brāh-maṇassa padasaddena sīsaṃ vivari//

その時に、世尊はスンドリカ・バーラドヴァージャの足音を聞いて、頭の衣包みをお脱ぎになった。

6. Atha kho sundarika-bhāradvājo

brāhmano// muṇḍo¹² ayam bhavam mundako ayaṃ bhavan-ti// tato ca puna nivattitu-kāmo ahoṣi// //

その時に、バラモンであるスンドリカ・バーラドヴァージャは「この方は頭髪を剃っておられる！この方は剃髪者である！」といて、その場から引き返そうとした。

7. Atha kho sundarika-bhāradvājassa

brāhmanassa etad ahoṣi// // Muṇḍā pi

hi¹³ idh-ekacce brâhmanâ bhavanti //yaṃ
nunâbaṃ upasaṅkamtivâ jâtim
puccheyyan-ti// //

しかしながら [同時に]、彼はまた次のようにも思った。「この世では、或る[一部の] パラモンどもは、頭髪を剃っているということらしい。それならいざ、私はむしろ彼に近づいて、その出身(生まれ)を質問してみよう」と。

8. Atha kho sundarika-bhâradvâjo brâhmano
yena Bha-gavâ ten-upasaṅkami//
upasaṅkamtivâ Bhagavantam etad
avoca// // Kim jacco bhavan-ti// //

その時に、バラモンであるスンドリカ・バーラドヴァージャは、世尊のおられるところにお近づきになった。お近づきになってから世尊に話しかけた。「尊者の生まれ(ご出身のカースト)は何でしょうか?」と。

9. Mâ jâtim puccha caranaûca puccha//
kaṭṭhâ have jâyati jâtavedo//nicâkulîno
pi muni dhitimâ//âjâniyo hoti
hirînisedho// //

[そこで尊師ブツダは、バラモンであるスンドリカ・バーラドヴァージャに詩を以て次のようにお答えになった。]
[カーストなどの出身をはじめ、人間の] 生れを問うてはいけない。[その人間の] 行いを問いなさい。実に火というもの(jatavedo:生まれたものたちを知る者)は、[その辺のどんな] 木っ端からでも生ずるものである。[たとえ人々が] 卑下するような家の生まれであっても、聖者として優秀な才能の人(ajaniyo:駿馬の意)であり、恥を知り慎みを知って

いるならば、悪業を止めて聖者に生まれることになる¹⁴。

saccana danto damasâ upeto//vedantagû
vûsita-brahmacariyo//yaññupanîto¹⁵ tam
upavhayetha¹⁶//kâlena so jubati¹⁷
dakkhiṇeyyo ti¹⁸// //

真実に依拠して、[自己を] ととのえ節制し、(自己の心の) 節制を身につけ、ヴェーダの奥義に通達し、梵行(清らかな行い)を修了した人、正にそのような人にこそ、お供物のおさがりをもたらし供え、食事を供養して呼びかけなさい。その人が供養に相応しい人ならばお供物をささげなさい。¹⁹

10. Addhâ suyittham suhutam²⁰ mama
yidaṃ//yaṃ tâdisaṃ vedagum
addasâmi²¹//tumhâdisânam hi
adassanena//añño jano bhuñjati
havyasesan-ti// //Bhuñjatu bhavam
Gotamo brâhmano bhavan-ti// //

「実に私のお供物は真実に祀られた供儀なのです。あなたのようなヴェーダの先生にお会いできたのですから。今まであなた様のような先生を見たことがありません!ですから私のお供物のおさがりは、[あなた様以外の] 他の人々が受けて食べません。どうか尊者は[私からのお供物を] 受けてお召し上がりくださいませ!尊者ゴータマは実に[本物の] パラモンです。²²」

11. Gâthâbhigîtaṃ me abhojaniyaṃ //
samppassataṃ brâhmana n-esa dhammo //
gâthâbhigîtaṃ²³ panudanti buddhâ //
dhamme sati brâhmana vuttir esâ // //

「詩偈を唱えて [行為の報酬として] 得たものを、私は食べてはならないのである。バラモンよ、これは正しく見る人々（真理に目覚めた人たち、諸仏）の法（道理）ではない。詩偈を唱えて得た代価を目覚めた人たち（諸仏）は斥ける。バラモンよ。[こうした] 法（道理）が [歴然と] あるのである。これこそ目覚めた人たち、[諸仏の] 生活の道（実践法）なのである²⁴。（下線筆者）

バラモンよ。私は如来と如来の弟子の他には、天界の神々・魔界・梵天界を含めた世界に於いて、[さらに] 沙門・バラモン・人間界を含む生きとし生けるものの中で、このお供物のおさがりを食べて消化し得る人を見ることはない。バラモンよ。したがってそのお供物のおさがりを草の生えていないところに捨てなさい。[そうでなければ、] 小さな虫の住んでいない水中に沈めなさい。

Aññena ce kevalinaṃ mahesiṃ //
khîṇāsavaṃ kukkucavûpasantaṃ //
annena pâṇena upaṭṭhahassu //khettaṃ
hi tam²⁵ puññapekkhassa hoti ti²⁶// //

完全なる智慧の大聖人、[すなわち] 煩惱を滅尽し、悪行による後悔の消え去った人に対しては、[あなたが望むように] 飲食をもって捧げなさい。それは功德を積もうと望んでいる者の田(福田)であるからである。²⁷」

12. Atha kassa câham bho Gotama imaṃ
havyasesaṃ dammî ti// //
- 「尊者ゴータマよ。それならば私はこのお供物のおさがりを誰に差し上げるべきでしょうか？」
13. Na khvâhaṃ brâhmaṇa passâmi sadevake
loke saṃâ-rake sabrahmake sassamaṇa-
brâhmaṇiyâ pajâya sadevama-nussâya
yass-eso²⁸ havyaseso bhutto
sammâpariṇâmuṃ gaccheyya// aññatra
brâhmaṇa Tathâgatassa vâ Tathâgatasâ-
vakassa vâ// tena hi tvaṃ brâhmaṇa taṃ
havyasesam appa-harite vâ chaṭṭehi
appâṇake vâ uduke opilâpehî ti// //

14. Atha kho sundarika-bhâradvâjo brâhmaṇo
tam havya-Sesaṃ appâṇake uduke
opilâpesi// //

その時に、バラモンであるスングリカ・バーラドヴァージャは、そのお供物のおさがりを小さな虫の住んでいない水中に沈めた。

15. Atha kho so havyaseso uduke pakkhitto
ciccitâyati ciçici-tâyati sandhûpayati
sampadhûpâyati// // Seyyathâpi nâma
phâlo divasasantatto uduke pakkhitto
ciccitâyati ciçicitâyati sandhûpâyati
sampadhûpâvati// evam eva so
havyaseso uduke pakkhittociccitâyaticicici
tâyatisandhûpâyatisampadhûpâyati//

その時に、お供物のおさがりは水中に捨てられると、シュツ！シュツ！と音を立てて煙りが生じ、大きく湯気が立ち上がった。それは恰も日中の太陽に熱せられた鋤の先が、水中に投げられると、シュツ！シュツ！と音を立てて煙りが生じ、大きく湯気が立ち上がるようであった。

16. Atha kho sundarika-bharadvâjo brâhmaṇo

samviggo lomahaṭṭajāto yena Bhagavā
ten-upasaṅkami// upasaṅka-mitvā ekam
antam atthāsi// //

その時に、バラモンであるスンドリ
カ・バーラドヴァージャは、驚愕し、身
の毛立ち、[信仰心を起こして] 世尊の
もとへと近づいた。近づいて傍らに立ち
尽くした。

17. Ekam antaṃ ṭhitaṃ kho sundarika-
bhāradvājam brāhmaṇaṃ Bhagavā
gāthāya ajjhabhāsi// //

傍らに立ち尽くしているバラモンであ
るスンドリカ・バーラドヴァージャに、
世尊は詩偈をもってお話になった。

Mā²⁹ brāhmaṇa dāru samādahāno// //
Suddhim³⁰ amaññi bahidhā hi etaṃ//na
hi tena suddhim kusalā vadanti//yo
bāhirena parisuddhim³¹ icche// //Hitvā
ahaṃ brāhmaṇa dārudāhaṃ//ajjhataṃ
eva jalavāmi³² jotim//niccaggiṇi
niccasaṃāhitatto³³//arahaṃ³⁴ aham
brahmacariyam carāmi// //Māno hi te
brāhmaṇa³⁵ khāribhāro//Kodho dhūmo
bhasmani mosavajjaṃ³⁶//Jihvā sujā
hadayam jotitthānaṃ//attā sudanto
purisassa joti// //Dhammo rahado
brāhmaṇa sīlatittho anāvilo sabbhi satam
pasattho³⁷//yatta³⁸ have vedaguno³⁹
sinātā⁴⁰//anallīnagattā⁴¹ va taranti
pāraṃ⁴²//Saccaṃ dhammo saṃyamo
brahmacariyam//majjhesitā brāhmaṇa
brahmapatti//satujjubhūtesu namo
karohi//tam ahaṃ naraṃ dhammasārī ti⁴³
brūmī ti// //

「バラモンよ。木片を集めて火を焚き上

げて、その清浄を不死の境地（涅槃）と
してはならない。なぜならば、これは他
のことだからである。

他のことによって清浄を求める人は、こ
れでは清浄とはならないと智者は説く。
バラモンよ。私は木片の火を焚き上げる
のを止めて、内なる火を燃やす。

一切智に依って燃え、常に静かにして、
阿羅漢である私は、梵行を実践している。
バラモンよ。あなたの傲慢さは[とてつ
もなく重い] 一石の荷物となっている。
煙りは忿であり、灰は妄語である。

木の柄杓は舌で、供犠の炎は心である。
[本当の] 人の火とは、自らよく [心を]
ととのえることにほかならない。バラモ
ンの戒の棧橋（霊場としての沐浴場）で
あるダンマ（法）の湖は、汚れなく澄み
切って、常に善行の者に讃えられている。
そこに聖者はやって来て沐浴し、五体を
清めて彼岸に渡るのである。

真理とダンマ（法）と感官の制御とが、
[私にとっての真実の] 梵行なのである。
バラモンよ。このことは中道 [の教え]
に依拠しているものであり、最勝なるも
の（本当の涅槃：brahmapatti）を得る
ものなのである。正しい憶念の人（正念
の行者）こそに帰依しなさい。私はそう
いう人をダンマの帰依者（随法行者）と
呼ぶのである」と。

18. Evaṃ vutte sundarika-bhāradvājo
brāhmaṇo Bhaga-vantaṃ etad avoca// //
Abhikkantaṃ bho Gotama abhi-kkantaṃ
bho Gotama// pa//

以上の如くに説かれて、スンドリカ・バ
ラモンは世尊にこう申し上げた。

「ゴータマよ、なんて素晴らしいことか！

ゴータマよ、なんて素晴らしいことか！」

19. Aññataro ca panāyasmā bhāradvājo

arahataṃ ahoṣī ti // //

このようにして尊者 [スンダリカ・バラモンの] バラドヴァージャは、阿羅漢のひとりとなった。

【4】布施を拒否するブッダ―耕作する (カシ)・バラモンの場合⁴⁴

§ 1.Kasi.⁴⁵

1. Evam me sutam ekam samayam Bhagavā
Magadhesu viharati Dakkhināgirismim
Ekanālayam brāhmaṇa-gāme // //

次のように私は聞いている。[すなわち] あるとき尊師 (ゴータマ・ブッダ) はマガダ国のダッキーナ・ギリ (南山) にあるエーカーラー (一つの茅) というバラモン集落に滞在されていた。

2. Tena kho pana sumayena kasi-
bhāradvājassa⁴⁶ brāh-manassa
pancamattāni nangalasaṭāni payuttāni
honti vappa-kāle // //

その時、カシ (= 農耕の意)・バラドヴァージャ [という名の] バラモンが種をまく時の五百基の鋤が [牛に] 装着されていた。

3. Atha kho Bhagavā pubbanhasamayam
nivāsetvā patta-civaram ādāya yena
kasi-bhāradvājassa brāhmanassa kam-
manto ten-upasankami // //

その時、尊師 (ブッダ) は午前中に內衣を着て、鉢と重衣を持ち、バラモンのカ

シ・バラドヴァージャが作業するところへ近づいていった。

4. Tena kho pana samayena kasi-
bhāradvājassa brāh-manassa parivesanā
vattati // //

まさにその時、バラモンのカシ・バラドヴァージャは食べ物を [農耕する仲間たちに] 配膳していた。

5. Atha kho Bhagavā yena parivesanā
ten-upasankami // upasankamitvā ekam
antaṃ atthāsi // //

その時尊師は、食べ物が配膳されているところに近づかれて、その側に立ちどまられた。

6. Addasa kho kasi-bharadvājo brāhmano
Bhagavantaṃ pindāya thitaṃ // disvāna
Bhagavantaṃ etad avoca // // Aham
kho samana kasāmi ca vapāmi⁴⁷ ca //
kasitvā ca vapitvā ca bhujjāmi // //
Tvam pi samana kasassu ca vapassu ca
// kasitvā ca vapitvā ca bhujjassuti //
//

バラモンのカシ・バラドヴァージャは、尊師 (ブッダ) が施される食べ物を待って立たれていらっしゃるのを見た。そこで尊師に向かってこう言ったのである。

「沙門 (努力する人) よ。私は耕作し、そして種まきもします。耕作して、そして種まきをすることによって、[ようやくこのように] 食べているのです。あなたも自身で耕作し、そして種まきをすることによって、自身で食べてください」と。

7. Aham pi kho brâhmana kasâmi ca
vapâmi ca // kasitvâ ca vapitvâ ca
bhujâmiti // //

[これに対して、尊師ブツダは次のよう
にお答えになった。]

「バラモンよ。私もまた耕作し、そして
種まきをしています。耕作して、そして
種まきをすることによって、[いつもこ
のように] 食べているのです」と。

8. Na kho mayam passâma bhoto⁴⁸

Gotamassa yugam vâ va nangalam vâ
phâlam vâ pâcanam vâ balivadde vâ //
atha ca pana bhavam Gotamo evam âha
// // Aham pi kho brâh-mana kasâmi ca
vapâmi ca // kasitvâ ca vapitvâ ca
bhujâ-miti // //

[これに対して、バラモンのかし・パー
ラドヴァーシャは次のように言った。]

「[あなたはそう言いますが、しかしなが
ら] 私たち（カシ・バラモン）はゴータ
マ殿のくびき、鋤、鋤の鋼、[牛を促す]
突き棒、牛、いずれも見ることがありま
せん。それなのにもかかわらず、ゴータ
マ殿はこうおっしゃいます。

「バラモンよ。私もまた耕作し、そして
種まきをしています。耕作して、そして
種まきをすることによって、[いつもこ
のように] 食べているのです」と。

9. Atha kho kasi-bhâradvâjo brâhmano

Bhagavantam gâthâya ajjhabhâsi // //
Kassako patijanâsi // na ca passâmi te kasim
//Kassako⁴⁹ pucchito bruhi // katham janemu
tam kasin-ti // //

そこでバラモンのカシ・パーラド
ヴァーシャは、尊師に詩偈を以て話しか

けた。

「あなたは耕作者であると自称されます
けれども、私たち（本当の耕作者）はあ
なたが耕作するのを見たことがありませ
ん。あなたに質問しますから、あなたが
耕作するというのを、理解できるように
に私たちへ話してください。⁵⁰」

10. Saddha bijam tapo vutthi // pajja me
yuganangalam // hiri isâ mano yottam //
sati me phâla-pâcanam // //

[これに対して、尊師ブツダは次のよう
にお答えになった。]

「私にとっての信仰が種です。私の苦行
が雨です。私の知慧がくびきと鋤です。
私の [過去の悪業に懺悔してる] 慚愧の
念が鋤の柄です。私の心が [柄に鋤を]
縛りつける縄です。私が常に心に刻み込
んでいること（憶念）が鋤の鋼と [牛を
促す] 突き棒です。⁵¹

kâyagutto vacigutto // âhâre udare yato
//saccam karomi niddânam // soraccam
me pamocanam // //

[私は] 身体を節制し、言葉を慎みとと
のえています。私は節度のある食事をし
ています。私 [にとって] は真実をまも
ることが草刈りです。私にとって柔和で
あることは [休憩するために牛から] 軛
を取り外すことなのです。⁵²

viriyaṃ me dhuradhorayaṃ //
yogakkhemâdhivâhanam //gacchati
anivattantaṃ // yattha gantvâ na socati
// //

私の努力は自分の荷物を負う牛であり、
安らぎの境涯（=涅槃）へ導いてくれま

す。そこに至ったならば、何ら憂えることもありません。後戻りせず〔涅槃の境界に近づくように前へ〕進みます。⁵³

Evam̐ esa kasi katthâ // sâ hoti
amatapphalâ // etam kasim kasitivâna //
sabbadukkhâ pamuccati ti // //

この〔私の述べるところの〕耕作はかくの如くになされます。〔したがって苦の尽き果てた〕不死の果報（涅槃という結果）をもたらします。こうした〔仏道という〕耕作を行ったならば、〔すべての人は〕あらゆる苦しみから解放されるのです〕と。⁵⁴

11. Bhujjatu bhavam̐ Gotamo kassako

bhavam̐ Gotamo⁵⁵ //yam hi Gotamo
amatapphalam pi kasim kasatiti // //

〔そのときバラモンのカシ・バーラドヴァーシャは、大きめの青銅の鉢にパユサ（乳粥）を盛りつけて、尊師ブッダに布施した。〕

「ゴータマ様！あなた様は乳粥をお召し上がりください。ゴータマ様！あなた様は耕作者です。実にゴータマさまは、不死の果報（涅槃という結果）をもたらす耕作を行っていらっしゃるからです」と。

12. Gâthâbhigitaṃ me abhojaniyaṃ //

〔これに対して、尊師ブッダは次のようにお答えになった。〕

〔詩偈を唱えて〔行為の報酬として〕得たものを、私は食べてはならないのである。〕⁵⁶（下線筆者）

Sampassataṃ brâhmana n-esa dhammo
//

バラモンよ、このこと（説法という行

為の報酬として布施されたものを食べるということ）は、正しく見る人々（正覚者たち）の法（道理）にかなわないのです。

gâthâbhigitaṃ panudanti buddhâ //

詩偈を唱えて〔報酬として〕得たもの（代価）を、目覚めた人々（ブッダたち）は斥けられます。（下線筆者）

dhamme sati brâhmana vuttir esâ // //

バラモンよ、〔こうした〕法（道理、教え）が〔歴然として〕あるのである。これこそ〔目覚めた人々のとるべき正しい生活の道、実践法にかなう〕態度なのです。

aññena ce kevalinaṃ mahesim //

khīṇāsavam kukkucavūpasantaṃ //
annena pānena upatthahassu //khettañhi
taṃ puññapekkhassa hotī ti⁵⁷//

道の完成者、偉大な仙人、迷妄の漏をほろぼし消滅した人に対しては、これ（報酬としての食事）以外の食べ物をささげなさい。何とならば、それは功德を積もうと求める人のために〔福德の〕田となるからです」と。⁵⁸

⁵⁹Evam̐ vutte kasi-bhâradvâjo brâhmano

Bhagavantaṃ etad avoca // //

Abhikkantaṃ bho Gotama abhikkantaṃ

bho Gotama // seyyathâpi bho Gotama

nikkujjitaṃ vâ ukkujjeyya paticchannaṃ

vâ vivareyya mulhassa vâ maggaṃ

âcikkheyya andhakâre vâ telapajjotaṃ

dhâreyya cakkhumanto rupâni dakkhinti

// evam̐ evam̐ bho Gotamena

anekapariyâyena dhammo pakasito//

以上の如くに説かれて、カシ・バラモンは世尊にこう申し上げた。

「ゴータマよ、なんて素晴らしいことか！
ゴータマよ、なんて素晴らしいことか！
喩えれば、倒れていた人を起こすように、
覆われたものをはがすように、道に迷った者に道を指し示すように、あるいはまた、闇の中にあつて『眼のある人は色かたちを見るであろう』といて灯明 (telapajjota) をかざすように、まさにちょうどそのように、ゴータマさまはいろいろな方法で真理を説明されました。

esāhaṃ bhagavantaṃ Gotamaṃ saraṇaṃ
gucchāmi dhammaṅca bhikkhusaṅghaṅca
// upāsakaṃ mam bhavaṃ Gotamo
dharetu ajjatagge pānupetaṃ saraṇaṃ
gatan-ti // //

したがって私は、尊師ゴータマさまに
帰依します。また法 (dhamma) と、修
行僧の集まり (教団) に帰依します。私
はゴータマさまのもとで出家します。完
全な戒律 (具足戒) を受けたいと思いま
す」と。

【5】見出された課題—小結にかえて—

上記の試訳を通して、ゴータマ・ブッダが布施に対して如何なる価値観を抱いていたのか、その判断に関する重要な根拠が判明したと考える。すなわちスンドリカ・バラモンおよびカシ・バラモンのそれぞれに対して、二重の意味で布施の受領を禁止せしめたという事実が展開していた。これらを一覧にすると下記の表の通りであると確認される。

すなわち情報整理に基づくならば、ブッダの説示する出家者が布施を受理する資格とは、日

頃から戒行を守り、自己の節制を成し遂げた「人格の完成者」であることに尽きることになる。換言すると、布施の根拠はあくまでも説法を含む何らかの行為が対象であってはならないという意味である。

SNにおける布施の根拠と授受の可否

	スンドリカ・B	カシ・B	ブッダ	道の完成者 (ブッダの説示内容)
布施の根拠	拝火	農耕	説法	戒行
布施の意義	拝火に対する報酬	農耕に対する報酬	説法に対する報酬	自己の節制
授受の評価	拒否	拒否	拒否	容認

このように仏典では呪術や農耕はもちろんのこと、説法さえも行為の範疇と把握され、布施の対象となることを禁じていることがわかる。筆者はこれまで拝火の呪法は仏教の批判する神秘主義的な要素であること、あるいは農耕に関しては世俗の生産活動であることが布施の対象外とされるべき主な禁止の理由であると漠然と見なしてきた。しかしそれは筆者の誤解であることが判明した。なぜならば、もしそれらが布施を拒否する単なる理由であるならば、もし正しい仏法が堂々と説示された際、その対価として布施を受理してもよいはずだからである。それではブッダの説く崇拝の対象とは那邊にありやということになるが、小論における提示に基づくならば、仏教成立以前の諸宗教、とりわけバラモン教が徳 (善行) の実践を祭祀と位置づけていたことに対して、仏教はその祭祀に伴う供犠を禁止したことにある。しかしこれは同時に、仏教が宗教的崇拝の対象を実在する「人格」に大きく転換させたことを意味するものである。

さらに言えば説法（言語行為）の聴聞による主体者の理解を知見（jñāna-darśaṇa, samyag-drṣṭi）とし、法（dharma）に基づく戒行（節制行為）による経験的な知得を正覚（abhisambodhi）と位置づけるとき、知見と正覚を区別せしめる臨界点が布施という宗教的営為となるのではないか。然らば「如実知見→厭離→解脱→解脱知見」⁶⁰という初期仏教における基本的構造は如何なる意味を有するのであろうか。「darśaṇa < mokṣa」との評価と解して妥当なのであろうか。

上記の判断にはさらなる慎重な考察が必要となるが、現段階として小論における仮の結論を設定するならば、以下の通りである。

1. 布施の対象は呪法や農耕はもちろんのこと、説法を含む行為の対価としては拒否される。
2. 布施の対象は、自己の節制を保ち続ける人格に与えられる。
3. 布施の根拠として、知的理解は拒否され、感官節制の実践者は容認される。
4. 布施が拒否された場合、その後に施物が白煙を上げるなどの奇跡の場面が展開し、授者に畏怖の念を抱かせることがある。

すなわち人格を崇拝するという意味を宗教的にとどのように結論づけるべきか、そして仏教という祈りの宗教が道徳や哲学とどのように一線を画すべきか、その壮大な問題の視野が布施という営為の検討を契機として開かれることを予見して一旦擱筆する。

1 神崎繁訳『ニコマコス倫理学 アリストテレス全集15』（新版）（岩波書店、2014年）、M. オズーフ（阪上孝訳）「友愛」『フランス革命辞典』みすず書房、1995、pp.4353-4389、Liberté, égalité, fraternité, in Lieux de Mémoire (dir. Pierre Nora), tome III : Les France. De

l'archive à l'emblème, éd. Quarto Gallimard, 1997,

ただし博愛主義が例えばフランス革命におけるロベスピエールのジャコバン派による「博愛化（fraternisation）」という制度的強制に繋がり、独裁と恐怖政治に辿り着いたことや、かつて「四海同胞主義」のもとに民族主義的な大同団結に帰結した問題等が知られるが、あるいは関連して「慈（maitrī）」と「悲（karuṇā）」の観点から仏典における博愛主義の思想的検討が必要であらうと思われる。

2 『佛説無量壽經』（No.360康僧鎧訳）大正新脩大藏経 Vol. 12p.277-b-ll.27 ~ 28

「尊聖敬善仁慈博愛。佛語教誨無取虧負。當求度世拔斷生死衆惡之本云々」と仏教が博愛主義であることを宣言する。その他に主な經典として『佛説普曜經』（No.186）持人菩薩經（No.481）萬善同歸集（No.2017）法苑珠林（No.2122）諸經要集（No.2123）にも「仁慈博愛」の語釈がある。

さらに「衆生を愛する」という博愛主義の主な説示を確認すると次の通り。

『佛般泥洹經』（No.5）p.170-a-l. ~ p.170-c-l.13
「子願令親安王亦赤心。慈愛衆生等之於子貧給財寶飢云々」

『佛本行經』（No.193）p.90-c-l.22 「地行乘空者。宜慈愛衆生云々」

『大寶積經』（No.310）p.116-b-l.21 「以愛衆生慧。饒益諸世間云々」

3 Sutta-Nipāta:No.1043 ~ 1048, 中村元『原始仏教の思想 I』春秋社、p.37に当時の世相についての説明あり。Samyutta-nikaya との対応箇所は、中村元『ブツダのことは スッタニパータ』岩波文庫、1958年、p.219f.

The Sutta-nipāta. V.Fausböll ed, xx,209. London,for Pali Text Society by Oxford University Press, 1885.

4 仏教とバラモン教の双方に共通するのが「苦行の実践」である。神々への祭祀という行為に苦行が伴うならば、実践行為そのものへの布施となり、これが仏教の修行、あるいはそれが説法という実践行為そのものへの布施に転化される場合もあり得るからである。実際、それ以降の仏教に於いては苦行と布施がワンセットにされるようになるが、初期仏典におけるブツダの言動を見る限り、あくまでも布施は倫理的な人格に対して捧げるべきものと意思表示が確認できるであろう。その意味で布施の内容を確認することが仏教の新たな宗教的転換を知ることになる。

5 *MahāBhāratam with the Commentary of Nilakantha*. Printed ed. Shankar Narhar Joshi, at Chitrashala Press. Poona 1929. (以下 MBh.) III, p.281, 96:tapas...dattam hutam

MBh. IV .p.39,p.28:hutam dattam tapas taptam

6 AN.vol. IV ,pp.292-293

7 M.Léon Feer ed, *Samyutta-nikāya* Vol. I ,

Pali Text Society,1973,London,p.167,l.18～p.170

8 B.bhuñjeyyāti.

9 B.C.sasīsaṃ.

10 S1-3 pārūpitaṃ.

11 S1-3gahetvāna.

12 S1-3muṇḍako.

13 S1-3add ca.

14 Sn:No.462

15 B.yañño-.

16 S1 upavuhayetha.

17 S1-3 duhati

18 B.dakkhineyyeii.

19 See Sutta-Nipāta: No.463,

20 S1-3 ahutam.

21 B.addasūma.

22 See Sutta-Nipāta: No.479

23 S1-3 vācābhigitaṃ.

24 See Sutta-Nipāta:No.480, No.81

25 S1-3 teua (or te taṃ) hite.

26 For these two gāthās (text and notes) see the preccding sutta.

27 See Sutta-Nipāta:No 481,No.82

28 B.yena.

29 S1-3 add vā.

30 S1-3 suddham.

31 S3 bālavena-; B.suddhim.

32 B.ajjhata-mevujjalayāmi.

33 S1-3 niccaggi niccamasāhitatto.

34 B.omits araham.

35 S1-3 hito (S1-te) brāhmanā.

36 C.-nimmo-.

37 B.pasaṭṭho.

38 S1-3 yatthā.

39 B.vedagūno; SS. havedaguno.

40 S3; B.sinhatā; S1-2 sinānanda (S2 daṃ) tā.

41 SS. anallagattā.

42 This gāthā will be found again in I l.11.

43 atha.

44 松浪誠達「ブツダが受けなかった布施・仏典の構造論的解明の試み」『現代思想』1977年12月臨時増刊号、第5巻第14号、pp.238～246にて伝道の過程が詳細に検討されている。

45 Ibid.This sutta recurs in the *Sutta-Nipāta* I 4.

46 S3 kasi- always.

47 B. vapp- always.

48 S3 bho.

49 S1 kasine or S3 kasune.

50 See Sutta-Nipāta:No.76

51 See Sutta-Nipāta:No.77

52 See Sutta-Nipāta:No.78

- 53 See Sutta-Nipâta:No.79
- 54 See Sutta-Nipâta:No.80
- 55 B.has not Gotamo.
- 56 See Sutta-Nipâta:No.81f
- 57 See avove I .8,9.
- 58 See Sutta-Nipâta:No.82
- 59 Hare the *Sutta Nipâta* inserts another episode.
- 60 舟橋一哉「阿含の實踐道における自覚の問題」『大谷大学研究年報』通卷2所収, 1943年, pp.277 ~ 363。